

恩返しはイジワル御曹司への嫁入り!?

プロローグ

歴代の首相がもてなしを受けたという和室に、私——菊池花音は座っていた。向かいには、世界に名の知れた大企業の会長、高御堂吉右衛門茂久。斜め向かいには、その孫で跡取りの高御堂英之が座っている。

四方八方を金箔の襖絵に囲まれた天守閣のような豪華な部屋で、高雅なオーラを放つ二人に注目され、消えたい気分だ。

そんな重苦しい空気の中、高御堂会長が宣言する。

「命を救ってくれた恩返しに、そなたを嫁として高御堂家に迎えて進ぜよう」
突然の言葉に、正常に働いていた私の頭は情報処理ができなくなった。

嫁？ 今嫁って聞こえたような？ 高御堂家に迎えるって？

まず、私は自分の聴覚を疑う。きつと聞き間違えたに違いない。

「よく聞こえなかったので、もう一度言ってもらえますか」

申し訳ありませんと付け加えて、丁重にお願いする。

「英之の嫁として、そなたを高御堂家に迎えて進ぜよう、と言っておる」

二度も言わせるなど言わんばかりに、高御堂会長が繰り返した。聞き間違いではない。

ということは、冗談を言っているのだろう。

今度はそう考え、笑えなかったものの、「面白い冗談ですね」と言ってみた。

「冗談など言っておらん」

高御堂会長は、ますます不服そうに答える。

私の脳が、ようやく真面目な話だと悟った。

確かにこの間、車に轢かれそうになった会長を助けたけど、孫と結婚しろって……

開いた口が塞がらないまま、高御堂会長をマジマジと眺める。

——白いロングヘアが後光のように肩まで流れ、フサフサした白い髭は儒者風。黄色の羽織に黄土色の着物というコーデの高御堂会長は、仙人のごとく私を見下ろしていた。

そりゃあ、鶴の恩返しとかグリム童話とか、命の恩人と結婚する話はよくあるし、幸運な物語と言われるけど、あくまでもお伽話の世界だし、それを現実でって、どうなの？

百歩譲って、大昔ならあったかもしれない。江戸時代とか、父がよく見ていた時代劇にありそうだ。

でも、現代でって、そんなのあり？

「ミレニアル世代の私には、ちよつと……お伽話すぎるかなと。折角ですけど、お受けできません」

できるだけ高御堂会長の気分を害さないように、言葉を選んで断った。すると、高御堂会長が豪快に笑う。

「いやはや、お伽話すぎるとはな。確かにこれほどの恩返しは現実にはなかなかかろう。じゃが、遠慮はいかん、遠慮は。謙虚さは美德とされるが、時に仇となる」

……遠慮していると捉えられてしまった。

手強すぎる。私を高御堂家に迎えることが、最高の恩返しだと信じて疑っていない。

私はまたしても、絶句した。

高御堂家は江戸時代から続く富豪。経済界で名を轟かせ、政界にも人脈がある名門だ。だけど、そんな上から目線の恩返しって……

「や、でも、結婚なんて考えたことも……まだ二十三歳ですし。好きな仕事に就けて、私生活も充実している今、凄く楽しいので、本当に結構です」

戦略を変えた私は、結婚自体考えられないという、リア充を主張して断る。

「交際している相手がいるということか？」

しびれを切らした高御堂会長が私に聞く。

そんなことまで話さないといけないの？

その時一瞬、ピリツとした視線を斜め向かいから感じた。

「い、いえ、いませんけど……」

いると言えば話が簡単だったのに。そこまで頭が回らなかった私は、正直に答えてしまう。

斜め向かいを見ると、高御堂英之が謎の微笑を浮かべている。

ザワツと胸が騒ぎ、私は即座に会長に視線を戻した。

「お嬢さん、時は得難くして失い易し、という故事成語をご存じかな？」

威厳たつぷりに言う会長に、私は「いいえ」と答える。

「好機はなかなか巡ってこない。恵まれたチャンスは逃しやすいう意味じゃ。だから、しっかりと掴み、駆け上がらねばならぬ」

「え、でも——」

「また、こんな故事成語もある。天の与うるを取らざれば反ってその咎めを受く。これは、天が与えてくれた好機は自分が取るべく定められたものであるから、これを取らないとかえって災いを招くという意味じゃ。好機は遠慮せず大切にし、充分生かすべきで——」

高御堂会長の故事成語解説が、畳み掛けるように延々と続く。

人の頂点に立つて生きてきた人間って、こんな風なの？

会長のみなげる自信に圧倒され、度が外れた提案に、ともすればイエスと答えそうになる。

それにしても結婚って、いくらなんでも……

高御堂英之に思わず視線を向けた私は、こちらを観察していた彼と目が合った。

——印象的な切れ長の目に、鼻筋の通った品の良い高い鼻。シャープな顎のライン。

女性なら誰でもときめきそうな彼の視線は、私を落ち着かなくさせる。

彼はどう思っているのだろうか？

表情からは読み取れない。でも、恩返しのために見ず知らずの人間と結婚するなんて、承諾するはずがない。

彼なら会長を説得できるのでは。

私はそう考えて、彼から視線を逸らし、会長に再び臨んだ。

「でも結婚って、結婚する二人の意思で成り立つのでは？ たとえ私が承諾したとしても、英之さんが同意しないことには、どうにもならないと……」

私は高御堂英之に、「ですよね？」とバトンタッチをする。

それなのに——

「僕は賛成です。結婚に抵抗があるなら、お互いによく知ってから、考えればいいでしょう。取りあえず、結婚を前提にお付き合いを始めませんか」

高御堂英之が余裕の笑顔でサラリと言う。私の顔から笑みが消えた。

嘘でしょ……

これはどういうこと？

私と世代が同じなはずの高御堂英之が、この常識を逸脱した縁談に賛成するなんて。

足元の土台を崩された衝撃が、全身に走った。

「どうじゃ、英之は乗り気じゃ」

会長が、シヨックから立ち直れない私に返事を促す。

高御堂英之もその言葉を否定せず、私を見つめている。

私の常識が間違っているの？ それとも庶民の常識は、上流階級の彼らに通じないとか？
あるいは、もしかして!? と稲妻のように閃いたある説に、ハツとする。

実は私、会長を助けた事故で死んでいて、恩は結婚で返すのが当たり前なパラレルワールドにト
リップしているのでは——？

そうに違いないと、一瞬信じておののきかける。

もう何が何だか分からない。

誰でもいいから、私に理解できるように説明してほしい。

一体、何がどうなって、私はこんな状況に置かれているの??

一

事の起こりは、雪が降り止み、仕事帰りに寄り道する人々で賑わう金曜日の夜。

私はケーキの箱を手に、実家へ急いでいた。

今日は五歳になる妹、芽衣の誕生日。

十八も歳が離れた妹のために、定時きっかりに職場を出た私は、注文していたクマの立体ケーキ
を人気のケーキ屋さんから受け取って、電車を乗り継ぐ。

サプライズにしたいなら、芽衣をおもちゃ屋さん连接到っているから、七時半までに準備し
てと、母に言われていた。

スマートフォンを見ると、もう既に六時四十五分。実家に着く頃には七時になるだろう。準備は
ギリギリだと考えながら、駅近くの通りを歩いている時だった——

一台の黒いSUVが、フラフラと走行しているのが目に映る。

白線をはみ出しては戻り、はみ出しては戻り……

ジッと見守っていると、一直線に私がいる歩道に向かってきた。

え？ えっ？ えーっ？ とアタフタする私の数メートル離れた斜め横を、白い髭を生やしたお
爺さんが歩いている。

車はモロにお爺さんのほうへ向かっていった。なのに、車とは反対の方向を向いているお爺さんは、気が付いていない。

「危ない！ 車がつっつ」

そう叫ぶと同時に、私はバッグもケーキもかなぐり捨てて走り出していた。

——間に合わない！

目前に迫るSUVに、赤いダッフルコートを着た私の体がジャンプする。お爺さんに体当たりすると、SUVの車体が風を切って私のブーツをかすめた。

私とお爺さんが地面に落下したのと、SUVが建物に衝突したのは、ほぼ同時だ。

バフツと落下の衝撃は雪に吸収され、重い衝突音が空気を揺るがす。

「大旦那様っつ」

目を開けると、執事っぽい黒い帽子に黒いコートを着た老年の男性が、しわがれ声で叫んでいた。

「その若者、救急車に連絡をつ。あなたは警察につ」と、もの凄い気迫で杖を使って人を指し、テキパキと指示を与える。

指示を終えると、その老年の男性はようやくシヨックから覚醒した私に手を差し伸べた。

でも、やっぱりお年寄りに、私の体重を支えるのは無理だ。私と執事っぽい男性は、白い髭のお爺さんの上にベチャッと倒れてしまう。

「ウツ」と白い髭のお爺さんが唸り、周りの人達が慌てて私と老年の男性、そして白い髭のお爺さんを起こした。

程なくして聞こえるサイレンの音、増える人ばかり。

どうしてこうなったんだっけ？

一瞬混乱して、記憶喪失になりかける。

「これ、あなたの？」

けれど、誰かにバッグとケーキが入った紙袋を手渡され、思い出した。

妹の誕生パーティーのために、実家に急いでいたんだ！

スマートフォンを見ると、時刻は七時。

まずいつ。時間がない！

駆け出そうとして、ハタと止まり、私は白い髭のお爺さんを見た。

「その方、名前は？」

お爺さんが、重みのある声で私に話しかける。

私は質問に答える前に、老人にしてはがっしりした体を上から下までチェックした。良かった。どこも痛そうにしていないうし、大した怪我はなさそうだ。

「ごめんなさい！ 今日、妹の五歳の誕生日なんですつ。急いでいるんで！ 私の下敷きになったので、必ず病院で検査してくださいねー」

菊池花音、二十三歳。

人生の分岐点となる出来事が起こったとも気付かず、私は人混みの中を駆け出した。

サプライズパーティーは、大成功だった。

数々の風船を超特急で膨らませて天井から吊り下げ、バースデーバナーとフラワーペーパーを壁に飾り……

その甲斐あって、芽衣は飾り立てられた部屋でピョンピョン飛び跳ねて、はしゃいでくれた。残念なことに、クマの立体キーキは首から上が崩れて不気味だったものの、お爺さんを交通事故から助けた事情を話すと、芽衣に凄いを連発され美談になる。

そして、次の日の土曜日は家族で動物園に行き、家族団欒を満喫。日曜日は自分のアパートに戻ってよく眠り、いつもと変わらない、月曜日の朝を迎えた。

私はシャツとベッドから起き上がると、朝ご飯を牛乳とトーストで済ませ、桃色のふんわりニットに膝丈のチェックスカートとタイツを合わせて、仕事に出かける。

私が勤務しているのは、グローバルな環境問題に取り組むNPO団体PEM JAPANだ。役員には大学の教授や弁護士が名前を連ねているが、常勤職員は水野所長を含む五名。他はアルバイト三名とボランティアの方々が構成されている。少人数の職場はアットホームで、皆仲が良い。

私はこの団体に学生の頃からボランティアで参加し、大学卒業後はアルバイトとして働き、最近やっと常勤職員に昇格した。

五名で仕事を回しているため難しいタスクを任せられることもあり、経験の浅い私にはキツイ。でも、やりがいを感じている。

そんな職場にいつものように始業時間よりも少し早く出勤し、皆にコーヒーを淹れていると、上司である水野所長に声をかけられた。

「花音ちゃん、先週の金曜日の夜、お年寄りを交通事故から助けなかった？」

事故のことを忘れかけていた私は、ポットを持った格好で美魔女な水野所長をキョトンと眺める。そうだった。確かにそんなことが。

けど、どうして水野所長が知っているの？ 家族にしか言っていないのに。

「誰に聞いたんですか？」

「えっ？ 知らないの？ 今ネットで話題になっている動画」

水野所長が綺麗にネイルがされた指で、スマートフォンをタップする。

「花音ちゃんにそっくりな女の子が、酔っ払い運転からお年寄りを救った瞬間を捉えた動画なんだけど……アレ？ 出てこない」

誰かがあの時の動画を撮っていたんだ。

「見なくても、それ、私ですから」

何も考えずに私がそう告白したところへ、ボサボサ頭の武田先輩が給湯室に入ってくる。

「花音ちゃんまで、そんなこと言い出しちゃったの？」

「え？ どういうことですか？」

「その動画を見た人が、片っ端から『助けたのは自分です』って名乗り出てるじゃん。だから收拾つかなくなってる、動画が消されたんでしょ」

「へ？ そうなんですか？ どうして皆が名乗り出るんです？」

「何も知らないで、私ですって言ってたのか？ それはだな、命を助けられたその人物が、何かつたって——」

「詳しいことがここに書いてあるわ」

水野所長が自分のスマートフォンを、サッと私に見せる。

そこには——

『亀蔵グループの高御堂会長を酔っ払い運転から救う！ 勇気ある女の子の動画が話題に』という見出しで記事が書かれていた。

その会社名に、引っ掛かりを覚える。

「亀蔵グループって、あのお酒の会社の？」

「そう。交通事故に遭いかけたのは、世界を股にかける大酒造会社の会長、高御堂吉右衛門茂久だったのよ。そんな人物の命の恩人となれば、お礼が凄（ぞ）いことになるかもしれないものね。そりゃ名乗りたくなるでしょ」

淹（ひ）れたてのコーヒートを、水野所長が武田先輩のマグカップに注いであげている。

高御堂吉右衛門茂久……

あの白髭（しろひげ）のお爺（じい）さんが、そんなお偉いさんだったなんて。

そういえば、執事っぽい年配の男性が「大旦那様」と呼んでいた。

大分間（おほいぶんま）があいてからそれを思い出して「あ〜」と声を出すと、武田先輩に「反応遅（おそ）い」と突っ込まれる。

「しっかし、その動画の女の子、確かに花音ちゃんに似てたよな。顔はそこまではつきりと映ってなかったけど」

「そうそう、ショートボブの髪型まで。花音ちゃんが一番に名乗り出たら、間違（まちが）いなくお礼をたんまりもらえたのに、惜（お）しかったわね」

水野所長も冗談（冗談）めかして、私の頭（かぶ）を撫（な）でる。そして、二人とも私にコーヒーのお礼を言って、給湯室（きゆうしつ）から出ていった。

私はコーヒートを啜（すす）りながら、ムムツと考え込む。

お礼（おれい）なんて欲しいとは思わないので、それは別にいい。別にいいけど、私（わたし）になります人が大勢いるのは、気持ち良くない。

でもまあ、いつか。

そう自己解決（じこけつげつ）して、美味しいコーヒーの味に満足（まんぞく）した後、自分のデスクに戻（かえ）った。

今日（けふ）も忙（いそ）しかつたけれど、何とか定時（ていじ）に仕事を一段落（いちだんらく）させて帰途（ききと）につく。

今夜（けふや）の予定（よるよ）は何もない。家に帰（かえ）って、ご飯（ごはん）を食べて寝（ね）るだけだ。

駅（えき）からトボトボと歩いて帰宅（きか）すると、アパートの前に高級車（こうきゅうしゃ）が停（と）まっていた。

何なの？ あの皇室の御料車みたいな車は？

黒くて長いリムジンに、私は目をしばたかせる。

ボロくはないが普通のアパートの前では、その車は浮いている。

運転席に、白い手袋をした運転手まで待機していた。

セレブがこのアパートを訪ねているの？

そう考えながら、階段を上ると――

上品な黒いコートに黒い帽子を被った人物が、私の部屋のドアの前に立っている。

摩訶不思議なことに、その人物はあの執事っぽい男性だった。

皺が刻まれた、にこやかな顔が向けられる。

その微笑に、妙な違和感を覚えた。

まさか私を訪ねてきたなんてことは……ないよね？

だって、私は一言も……

「菊池花音さんですな」

「ひゃっ、どうして私の名前を？」

しわがれ声で名前を呼ばれ、私は驚いて飛び跳ねた。

男性がわざわざ帽子を脱ぎ、薄い白髪を七三分けした頭を深々と下げる。

「先日は高御堂吉右衛門茂久を助けてくださって、誠にありがとうございます。私は亀蔵グループのオーナーである高御堂家に仕える者で、門松と申します」

そこまで言って頭を上げると、門松さんは帽子を被り直した。

「ど、どうやって、私のアパートを突き止めたんですか？」

不気味すぎる。名乗りさえしなかったのに。

「金曜日には五歳になった妹さんがいるという情報を頼りに、事故現場付近を聞き回りました。名前を割り出すのは造作もございません。それ以上のことは、私の口からは申し上げられません」

たったそれだけの情報で!? お金持ちって、凄い。

にこやかな笑顔を崩さない門松さんを、私は畏怖の念で眺めた。

「高御堂がぜひ会ってお礼をしたいと申しております。急ですが、今から高御堂家にお越し願えますか？」

「いえ、お礼なんていいです。そんなつもりで助けたわけではありません」

私は手をブンブン振って断る。

「そうおっしゃらずに。高御堂家の者が、食事を用意して待っています。車も待たせていますので、ぜひお越しください」

門松さんが笑顔で更に押す。

御料車のようなリムジンがパッと頭で浮かび、私は首を横に振った。

あのリムジンが待っていたのは、私だったの!? 恐れ多すぎる！

「本当に気持ちだけで、結構なので」

「いえ、大旦那様にお連れするように言われております」

「でも——」

そう言ったところで、門松さんの和やかな顔が激変した。

——グワツと見開かれた細い目に、深く刻まれた皺。

「とやかに言わず、来なされっ！」

年季が入ったホラーな形相で、門松さんが低く唸る。

ヒィーと震えた私は、コクコクと首を縦に振り、ただただ彼に従った。

リムジンの窓からライトアップされた石積みの高い塀が見えてきた。

帰りたい一心の私を他所に、鉄の扉が重々しい音を立てて開き、リムジンが敷地内に進む。大きく広がった屋根に、円窓や木製の化粧梁が合わさった、和モダンな家が姿を現す。

もっとフォーマルな服に着替えれば良かった。お化粧もきちんとしてくれれば。

その後悔は、リムジンが地下のガレージに駐車されると、ますます強くなる。

だだっ広いガレージに駐車された高級車の数々。

窓から壮々たる車を眺めていると、白い手袋をした運転手が車のドアを開けた。

一歩踏み出すなり、「ようこそ、おいでくださいました」と私の祖母くらいの年齢らしい、薄紫の着物を着た女性に出迎えられる。

「高御堂家で家政婦しております、白井キヨと申します。どうぞ、お見知りおきを」

グレイヘアをほつれもなく後ろにまとめた小柄なその女性は、厳しい目つきで私を上から下まで

眺めた。

なんか、人間性を測られてるっぽい。

「今夜限りの客なのだから、どんな人間でもいいのでは？」とは言えず、私はその視線に耐える。

「こちらへ」

私をどう思ったのかを曖昧にも出さず、キヨさんは無表情で私を屋敷の中へ案内した。

これほどの豪邸が、市の中心にあつたなんて。

廊下の奥にライトで照らされた中庭の景観が、広々とした玄関にいる私の目に飛び込んでくる。

中庭に面した渡り廊下を渡ると、和モダンな建物から、純和風の母屋に変わった。

美術的価値の高そうな絵画が所々に飾られ、それに圧倒される。しばらくしてようやくキヨさん

が、「こちらの部屋です」と立ち止まり、突如、廊下に座った。

何事っ!?

見守る私の前で、片手で障子を少し開け、手の位置を変えてもう一度開け、今度は反対の手で更

に開ける。

そうして障子を開け終わると、「あのお座席にお座りください」と指定して、私を中に促した。

えー？ あんな本格的な行儀作法の後で、和室を歩かされるの？

私、行儀作法なんて習ったことないのに。
厳しい視線を感じながらも、とりあえず畳の縁を踏まないように、指定された座布団へときどき進む。

座布団に到達すると、キヨさんが隣に来て、テーブルに置かれたお品書きを見せながら、アレルギーの有無と嫌いな食べ物、そしてお酒の好みを私に聞いた。

それが済むと、彼女は部屋から出て再び廊下に座り、三段階に分けて障子を閉め、ようやく去る。私はハーツと息をついた。

豪華な食事よりもアパートでお茶漬でも食べているほうが、よっぽど気楽だったのに。

部屋を見渡すと、日本の四季が描かれた金箔の襖に、天井絵、欄間の豪華な彫刻などが設えられている。どこかのお城の天守閣のような、格式の高い部屋だ。

ソワソワしてしまい、シオルダーバッグの中にあるはずのスマートフォンを探したものの、見当たらない。

そういえば、玄関先で預けたダッフルコートポケットに入れたままだ。

取りに行こうとして、立ち上がり障子を開けると――

部屋の外に長身の男性が立っていた。

多分二十代後半。

やや吊り上がった切れ長の目が印象的な、美形だ。

オフホワイトのセーターを着こなした彼は、二十センチと離れてない近さでも微動だにせず、私を見下ろしている。

つられて私も身動きせず、彼を見上げた。

「英之、何をしておる。入らんか」

彼の後ろから、聞き覚えのある重々しい声がする。

私はハツとして、塞いでいた入り口から退き、元の座布団に戻った。

着物を着た高御堂会長が、貫禄たっぷり部屋に入ってくる。

その姿に私はゴクリと唾を呑んだ。就職の面接でもないのに、キューッと胃が絞られる。

英之と呼ばれた男性が私の斜め向かいに座り、高御堂会長が私の向かいに座った。

「花音さん……じゃったな」

高御堂会長が、私の名前を確認する。

いきなり下の名前？

「菊池です」

緊張のあまり、私はつい否定してしまった。

ピクリと高御堂会長の白い眉が動き、私は間違えたのだとすぐに悟る。

「いえ、フルネームが菊池花音です。苗字が呼びにくければ、花音と呼んでいただいで結構です」

面接官に話すように、ハキハキと訂正した。

「左様か。コレは私の孫でな。英之と云う」

高御堂会長が隣で胡座をかいている、先ほどのイケメンを紹介する。

「初めまして」と中低域の渋い声で言われ、「初めまして」とできるだけ目を合わせないように返した。

彼の視線は始終私に向けられ、逸らされることがない。

向かいに座っているのが私しかないから当たり前なのだろうけど、視線を肌にしししと感じて、自意識過剰になりそうだ。

「そう固くならず、楽にいなさい」

高御堂会長に言われ、私は足を崩した。

「先日は、そなたのお陰で事故を免れた。恩に着的」

「恩だなんて、そんな。とにかくご無事で良かったです。お礼も全然なくて構わなかったのですか……」

「そんなわけにはいかん。然るべき礼をするのが、道義」

高御堂会長が断言し、私を見下ろす——こと数十秒。

会長はそれ以上、何も言わなかった。

何？ 何なのこの沈黙？ 私が何か言う番なの？

「あ、ありがとうございます」

何を言ったら良いのか分からなくて、お礼にお礼を返した時、「失礼します」と廊下からキヨさんの声が出て、またしても三段階に分けて障子が開いた。

再び沈黙が流れる中、彼女が美しい作法でゆっくりと食前酒を運んでくる。

「甘いお酒がお好みかどうかだったので、花音様にはアプリコットのリキュールをお持ちしました」

綺麗なガラス細工が施された、小さなワイングラスを私の前に置く。

「ほう、アレか。私は甘い果実酒は苦手だな」

そう言うと、高御堂会長は乾杯もなく、自分の前に置かれたスパークリングワインを口にした。

高御堂英之もスパークリングワインを飲んでいる。

私もグラスを口に運ぶと、二人の目が一斉に私に集まった。

そんなに注目しなくても……

カチコチになりながら、リキュールを口にする。甘さとサッパリ感がミックスされた味が、口に広がった。

「あ、美味しい」

「そうじゃろ。若い女性向けに作られた未発表の製品じゃ」

私の反応を満足げに眺めて、高御堂会長が頷く。

「こちらの、和食向けに開発されたスパークリングワインもイケそうですね。酸味が強くて、鮮魚の料理に合う感じがします。実際に料理と一緒に飲んでみないことには、分かりませんが」

高御堂英之が、スパークリングワインを味わいながら言う。

もしかして、私を食事に招いたのは、新商品のテイステイングのついでだった？

私に構うことなく、お酒を吟味する二人を前に、肩の力が抜けた。

「お料理をお持ちしました」

いつの間にかいなくなっていたキヨさんが、お手伝いさん風の女性と料理を持って戻ってくる。お刺身、天ぷら、丸ごとのカニ……

緊張が解けた私は、豪華な料理に心を躍らせる。

「わあ」

思わず素の声を出すと、高御堂英之のフツと笑う声がした。

彼と目が合う。

どうして私をそんなに観察しているの……？

彼と見つめ合っていることに気付いて、私はハッと目を逸らす。

とにかく食べよう。

この場限りの人のことは、深く考えないほうがいい。

手を合わせて「頂きます」と言い、食べ始めた。

——それなりに会話は続いたと思う。

お酒の商品開発の裏話を聞いたり、私の仕事を聞かれたり。

お酒が入っても、話すのは緊張したけど、どうにかやり過ごす。

そして、名だたる歴史的人物も招かれたという、この和室に纏わる話を聞いていた時だ。

「芸妓さんが来られました。お通しします」

廊下からキヨさんが声をかける。

芸妓？ と疑問に思いながら、私は綺麗に盛られた炊き合わせに箸を付けた。

「ごめんなんし」

障子が開くと、透き通った声の女性を先頭に、おしろいを塗った着物の女性達が五人、ワラワラ

と入ってくる。

私の箸から、里芋がポロリと落ちた。

三味線を持った年配の女性が簡単に音合わせをし、華やかな着物で着飾った若い女性達が並んで座る。挨拶をした後、彼女達は深々とお辞儀をし、舞始めた。

日本人形のような芸妓さんが、長い袖と扇を自由自在に操って優雅に踊る。初めて観る本物の芸妓さんの舞に、私は内心ビビっていた。

本格的なものでなしじゃん。

それほど社会経験のない私にとって、経済界の大物の本腰を入れたもてなしは、荷が重すぎる。

結構ですから！ と叫んで走り出したくなる衝動を必死に抑えた。

高御堂会長はというと、芸妓さんの踊りにすっかり魅入っている。高御堂英之のほうは、見ないようにしているから分からない——

いや、冷静に考えると、高御堂会長と会話をしなくて済むし、高御堂英之のほうを見なくて済むので、助かる。

高御堂家側もそれを考えて、呼んだのだろう。

そうありがたく捉え、料理と芸妓さんの舞に集中した。

「——ご馳走様でした。そろそろ、お暇を……」

限界まで食べ、芸妓さん達の舞がちょうど終わったところで、私は切り出す。

自分の役目は果たした。もう帰ってもいい頃だろう、と。

ところが――

「待ちなされ。まだ本題に入っていない」
腰を浮かせた私を、高御堂会長が止めた。

本題って何？

私が改まって座り直すと、会長が芸妓さんを全員追い出す。テーブルの上のお皿が片付けられたところで、会長が言った。

「事故のことじゃ。酔っ払いの車が迫っているにもかかわらず、車の前に飛び込んで私の命を救った勇氣に感銘を受けた。一生忘れはせぬ」

何だ、そんなこと？ と私は拍子抜けする。

要するに、事故のことを改めて言葉で感謝したいということだ。

「感謝なら、もう充分です。今夜、とても楽しかったです。私も一生、忘れません」

ちよつと大袈裟に、胸に手を置きながら言った。

「いや、充分ではなからう。一瞬でも間違えれば、そなたは命を落としていた。自分の命を顧みずに他人を救うということは、そうそうできることではない。非常事態にこそ、人の本性が現れるというものじゃ。動けずに傍観するだけの者、ましてや何処ぞやの者のように、助けようともせず事故の瞬間を動画に捉えるなど、誠にけしからん。無断でネットに動画を公開したことも、法的に然るべき処罰を与えねば――」

高御堂会長の話が、徐々に逸れていく。

長くなるのかな？ と気になり出した頃、高御堂英之が会長に何か耳打ちした。

「とにかくじゃ。亀蔵は江戸中期に創業され、私で十二代目になる。英之が後を継ぐと十三代となるが、まだ若年。私の力が必要じゃ。あの事故で死んでいたら、亀蔵は他人の手に渡り、高御堂家が代々築き上げてきたものが壊れてしまっていたであらう」

分かるか？ と高御堂会長が私に聞く。

この時、安易に頷いてしまったことを、私は後で悔やんだ。

まさか老人を事故から救ったことで――

「ということとはじゃ、私の命を救ったということは、高御堂家を救ったも同然。それに値する恩を返さねばならぬ」

――私の人生が百八十度も変わることになるなんて。

「英之の嫁として、そなたを高御堂家に迎えて進ぜよう」

あまりの奇抜な恩返しにたまげ、何とか断ろうとする私に、故事成語を並び立てて跳ね返す会長。極め付きに、高御堂英之が結婚を受け入れたことで、私の頭はパニックになる。

「……あの、とりあえず今日のところは帰って、家で考えます」

狐に抓まれたとしか思えない私は、そう言った。

朝目覚めると、普通に火曜日、澄んだ空に朝日が眩しい冬晴れの日だった。

私はいつもと同じ時間にアパートを出て、普段と変わらない電車に乗る。いつものように皆にコーヒーを淹れて、水野所長と雑談した後、仕事に取り掛かった。

昨夜のことは、幻だったのかもしれない。

仕事にどっぷり浸っていると、高御堂家を訪れたことさえ、まるで夢みたいな気がしてくる。高御堂会長に言われた言葉、高御堂英之に見つめられたことも何もかも――

そんなふうには高御堂家のことが頭の中から消え去りつつあった、お昼過ぎ。

お弁当を持ってこなかった私は、近くのベーカリーカフェでお昼をとった。

明日の朝ご飯にとクワッサンを買ってビルに戻ると、ある人物とエレベーターの前で鉢合わせする。

「昨夜はどうも」

ビジネスマン風のロングコートを着た長身の男性が、涼しげに言う。

私は息が詰まるほど驚愕した。

それは紛れもなく、高御堂英之だった。私の中では幻となりつつある……

「どうしてここに――？」

「君の話でこの団体の活動に興味を持ったから、寄付をしに来たんだ。君がどんな職場で働いているのか、気になったのもある」

昨夜とは違って、気さくに私に話しかけている。

寄付という言葉に、私は引っかけた。

「寄付って、結婚のことなら――」

断るつもりという言葉は続かなかった。高御堂英之が私の口を手で覆い、黙らせたのだ。

「……っ！」

冷たい彼の手の平が、私の唇から熱を奪う。

いきなりの彼の行動に、私の思考回路がフリーズした。私と彼の後ろを、ペチャクチャとお喋りをしながら、女性のグループが通り過ぎていく。

「今は時間がない。話をするなら、今夜しよう」

私が小さく頷くと、彼は手を離れた。

「今夜七時半に、君のアパートに迎えに行く。都合が悪くなったら、このメールアドレスに知らせてくれ」

そう言い残して、足早に去る。

私、昨日出会ったばかりの男性に、口を塞がれてた？

今更のように、彼の手の感触がありありと唇に蘇る。

急に頭に血が上って、胸が騒ぎ立てた。

どうしてこんなに胸が……

「大丈夫ですか？」

彼に塞がれていた唇を手で押さえていると、通りがかりの女性に心配される。

大丈夫ですと答え、私はエレベーターには乗らず階段を駆け上がった。胸の高鳴りを急激な運動で消すために。

息を切らして、オフィスに戻ると――

「高御堂英之つて、高御堂家の御曹司で亀蔵ホールディングスの取締役だろ？ 二十九歳の若さでさー。今は外部の人間が社長に就任してるけど、いずれ彼が社長になるつて言われているよな」

武田先輩と水野所長を含むスタッフの全員が集まって、高御堂英之の噂話をしていた。

「男前で、普通の人にはないオーラがあったわ。まだ独身でしょ？ もっと美人に生まれていたら、アタックしたのに。ああいうハイスペックの男性と結婚できる人が羨ましい」

三十代前半で独身の朝倉さんが、悔しがる。

「いやー、容姿よりも家柄重視だったりするんじゃないかしら。やっぱり育ちが似てないと、色々都合が悪いことが出てくるのよ。庶民にはムリムリ」

三十代後半で既婚の河本さんが言う。

家柄重視どころか、恩返しと宣つて、見ず知らずの私に縁談を持ちかけてますけど。

そうは言えなくて、会話の輪に入るのを避け、私は静かにデスクに戻る。

でも狭いオフィスで、気付かれないわけがない。

「花音ちゃん、聞いたわよー。亀蔵ホールディングスの会長を助けたのは、やっぱり花音ちゃんだつて。水臭いわー。どうして教えてくれなかったのよ？」

興奮した水野所長に話しかけられた。朝倉さんと河本さんが後ろで頷く。

「い、色々と事情がありまして……」

どんな風に彼は話したのだろうか？

あまり大事にしてほしくないのに、困る。

「そうなの？ それにしても、でかしたわ。高御堂英之がかなり気前のいい寄付をしてくれたの。花音ちゃん様様ね。彼は花音ちゃんに会いたかったみたい。来る途中、会わなかった？」

「あ、会ってません」

エレベーターの前で彼に口を塞がれたことを思い出し、また顔がカアーツと熱くなる。

「え？ 何で顔が赤くなるの？」

「赤くなってません」

水野所長に追及され、私は頬を両手で隠す。

「なってるつて。両手で隠してるし。もしかして、あの御曹司と何か――」

「えー？ 何々？」

朝倉さんと河本さんが私のデスクに身を乗り出して来る。

「変な勘ぐりはやめましょ。さ、仕事に戻るわよ。今日も定時に終わらせるんだから」

私が困っているのを察したのか、水野所長がパンパンと手を叩いて、皆をデスクに戻す。そして「恋愛なら相談に乗るわよ」と私に囁いて、所長もデスクに戻った。

どう考えても、この恩返しはおかしい。

私は人助けをしたはずなのに、どうして結婚を迫られ、頭を悩ませているわけ？

そもそも私は恩返しなんて望んでいないし、要求してもいないのに。なんとかして、縁談を断らないと。

私は少し怒っていた。

定時に仕事を終え、どう縁談を断るか考えながら帰途につく。

家に帰ると、服をセーターとデニムという更にカジュアルなものに着替え、約束の時間より五分ほど早く、アパートの前で高御堂英之を待った。

今夜の計画を更に練る。

雪がチラホラと降り始めた七時半きっかりに、彼は高級車で私を迎えに来た。

「外で待っていないくても、着いたら連絡するつもりだったのに。寒かったらろ」

「いえ、全然」

ほとんどの女の子を瞬殺できそうな彼の微笑みに、私は素っ気なく対応する。

すると彼が私の心中を察するような目を向けてきた。

「もんじゃ焼きが食べたい気分なので、もんじゃ屋さんに行ってもらってもいいですか。美味しい

お店を知ってるんです」

私は断固とした口調で言う。

作戦開始だ。

昨日の一件で、高御堂家の人間が一筋縄ではいかなないことは分かっている。

ここは、庶民の生活を見せて、私との結婚は無理だと理解してもらおうしかない。

「構わない。そうしよう」

高御堂英之はクールに対応する。予約をしていたらしい店に電話でキャンセルを告げると、私のナビゲートで車を走らせた。

道案内以外、特に会話をするわけでもなく、十分ほどで目的の商店街に着く。

ゴチャゴチャした商店街の通りで、クラシッくなロングコートを着た彼は、人目を引いた。

「らっしゅい」

ビルの三階にある、もんじゃ屋さんに入ると、威勢のいい声で迎えられる。

テーブルに着くと、「亀蔵の酒が少ないな」と彼がメニューをザッと見て呟き、ドライバーだからとお茶を頼んだ。

私は亀蔵ブランドではない、桃のチューハイを頼む。

「結婚のことですけど——」

「待った」

飲み物が来ないうちに本題に入った私を、間髪容れずに彼が止めた。

「すぐに、そんな話をしなくてもいいだろ。他の話をしよう」

余裕たっぷりそう提案する。

「例えば、どんなことを？」

彼のペースにはまっては駄目と、私は身構えた。

「そうだな、お互いに相手について知りたいことを質問し合うっていうのは？」

「お互いのことを知るのには、無駄だと思えます」

「無駄？ 俺はそうは思わない。この先、君と二度と会うことがなくても、縁があつてこうして食事をしている。せめてこの時間だけでも、お互いを知つても良いんじゃないか」

彼が真剣に私を諭す。

悔しいけど、それ以上何も反論できなかった。

飲み物と具材が同時に来て、店員が焼き方の説明をする。

「もんじゃ焼きって、焼き方を間違えると、味が落ちるんですよ」

店員が去ると、私は得意げに言った。

もちろん、もんじゃ焼きを選んだのは、彼には馴染みがないと踏んでのことだ。

高御堂英之に私との育ちの差を知ってもらわねば。

けれど彼は器をスツと持つと、出汁が零れないように具材だけを器用に鉄板に落として炒め始めた。

私より上手いじゃん。

当てが外れ、私は彼の腕に唾然とする。

負けてはいられないと、具材を鉄板に落とし炒め始めた。でも出汁を零してしまう。

「俺がもんじゃを焼けないと、高をくくっていただろ。残念だな」

ビチャビチャな私の具材を見て、彼が勝ち誇つたようにニヤツとする。

私は大人気なく、ムツとしてしまった。

「では、最初の質問です。もんじゃ焼きは何回食べたことがありますか？」

わざとくだらない質問をする。

適当に答えればいいのに、彼はうーんと難問のように考え込んだ。

「……三回かな」

しばらくして、何故かしみじみとしながら答える。

「一回目は亡くなった父親とだから、思い出がある」

「えっ。亡くなったんですか？」

彼の父親が亡くなっているとは知らず、具を炒めていた私の手が止まる。

「随分と昔だから、そんな顔をしなくていい」

「いつ亡くなったんですか？」

声のトーンも自然に落ちた。

「小学六年の時だ。元々心臓が悪くて——」

彼は父親が亡くなった時のことを、淡々と語る。

両親共に健在な私は、子供の頃に父親を亡くすなんて想像もできない。辛かっただろうと、彼の話に聞き入る。

「——って、暗い話はもう終わりだ。もう出汁を流し込んでもいい頃だろ」

しんみりした雰囲気は彼は明るく切り替えると、具材で土手を作り、出汁を流し込んだ。私もそれに倣う。

「……二回目にもんじゃを食べたのは、留学先のロサンゼルスだったな。イタリア人の友達とチーズとピザソースをやたらとかけて食べた」

それから彼は、邪道もんじゃを作ったエピソードを面白おかしく語って、私を笑わせた。その友達が作った他のおかしな日本料理の話を交えて。けれど、笑いが収まると、不意に真剣な顔つきになる。

「三回目は誰とだと思う？」

私を真っ直ぐに見つめた。

「え——？」

意表を突かれた私の瞳が、彼の瞳に囚われる。

私を見つめたまま、彼が魅惑的な声で囁いた。

「君とだ。今一緒に食べてる」

突如変わった空気に、無防備だった私の心臓がトクンと揺れる。

咄嗟に彼の視線から逃れるように、俯いた。

「も、もう混ぜないと」

そのまま、黙々と具と出汁を混ぜ始める。

絶対、私の顔はこれ以上ないくらい、真っ赤になっている。こんなに彼のアプローチに弱いなんて！彼のペースにはめられすぎ。

「今度は俺が質問する番だな」

彼は私の態度を気に留める様子もなく、もんじゃをお皿に取る。

「君の家族構成は？」

そして、答えやすい質問をした。

私はホッとして、顔を上げる。

五歳になったばかりの妹のことや、仲が良い父と母のことを話した。彼が熱心に聞いてくるので、祖父母や従兄弟のことまで打ち明ける。

話し終わると、私も彼の家族構成について聞いた。

門松さんとキヨさんは兄妹で高御堂会長とは乳兄弟ということや、一緒に住む大学生の弟が未だに反抗期真っ最中で、母親は高御堂会長と折り合いが悪く九州で静養中だということを、彼が冗談を交えて話す。

あっという間に時が過ぎ、私と彼はもんじゃ屋さんを出た。

そこで、ハタと気付く。

「本題に入つてない」

私が声を上げると、彼が息をつく。

「場所を変えて話そう」

私が助手席に乗ると、サプライズだからと目的地も告げず、彼は車を走らせる。始終深刻な表情の彼に、私も余分な会話は控えた。

やがて、市の中心にある高いビルの地下駐車場に着く。

高御堂英之が私を連れてきたのは、綺麗な夜景が見えるビル内の展望室だ。

貸し切ったかのように、私と彼以外全く人がいない。

窓の外に広がるどこまでも続く光の絨毯じゅうたんみたいな光景に、私は目を奪われた。

「綺麗……」

圧倒的な美しさに感動して、思わずうろたえく。

彼に見られているとは気付かずに。

「……君のほうが綺麗だ」

彼の言葉が、私の顔を再び火照ほてらせた。

そんな歯が浮くようなセリフを、サラリと言える人が実在するなんて。

薄暗い室内ということもあって、かろうじて私は顔を隠さずにいられた。

「どうして……そんなこと言うんですか」

何の得があつて、彼は——？

「思ったことを口にしただけだ」

彼が静かに答える。そして、おもむろに私の手を取った。

彼の冷たい手が私の冷たい手に触れている。

「事故の動画を見た時、衝撃を受けた。そこに映っていた君は、今まで会ったどの女性より綺麗だった」

映画のワンシーンのようだ。

完璧な演出に、滑らかなセリフ……

きらめく夜の光を背景に、私は彼に手を握られている。

「——その瞬間、俺は君に心を奪われた」

整った彼の顔が何かに煩わづらわされたように一瞬歪ゆがむ。

これは夜景の効果？

彼の手は冷たいのに、ジンとした熱さを感じる。

出会ったばかりの男の人の手を、私は振り解けないでいた。

「祖父は恩返しとして結婚を提案したが、俺は恩返しではなく、祖父に言われたからでもなく、君と結婚したい」

……私は、今彼にプロポーズをされているの？ ずっと恋愛なんて頭になかった私が？
しかも、高御堂英之というスペックが違う男性に。

「まだ結婚なんて、とてもじゃないけど考えられません……それに、合わないと思うんです」

頭がいつぱいいつぱいになりながらも、正直に胸の内を伝える。

「何が合わないんだ？」

彼が私の手を握ったまま囁く。

言おうか言うまいか迷った末に、私は言った。

「……私と高御堂さんの身分が」

音楽が途切れるように、私の一言で彼が漂わせていたムードが消える。彼の目が点になった。

「今の時代に身分も何も無い」

「でも、高御堂家は明らかに上流階級で、私は庶民の家庭で育ったし、価値観とか生活習慣とか、色んな面で絶対違うはずです。私が上流階級の家に嫁ぐなんて、ありえません」

「高御堂家は案外普通だ。一般の家庭とそんなに差はない」

彼が言い切った。

「本気でそう思ってます？」

けれど私の問いに、観念したようにため息をつく。

「確かに、大衆的ではない。でも君は高御堂家のことを何も知らない。なのに、ハナから合わない
と決め付けている。育った環境とは違っても、君に合うかもしれないだろ？」

彼が私を説得し始めた。

私は口をつぐむ。

「結婚のことは、今すぐに決断しなくていい。試しに俺と付き合っ
て、考えればいいことだ」

彼は答えを待つように、私を見つめる。

正直、返事に困った。

試しにと言われても、男性とお付き合いすること自体、私にとつてはハードルが高い。
付き合ってみて、やっぱり好きになれなかったという苦い経験もあるし。

「と、友達からなら……」

考えあぐねた末、蚊の鳴くような声で答える。すると、彼が明らかに不満そうに、私を見た。

「男性とお付き合いした経験がほとんどないんです。だから、いきなり付き合うなんて無理です」

私はキツパリと言う。

「今まで何人と付き合った？」

彼が興味深げに聞く。

「一人だけ」

「いつ？」

「高校の時」

「大学の頃は？」

「ゼロです。ボランティアに目覚めて、長期の休みには発展途上国でゴミ処理問題に取り組んで
いたし、恋愛に全然興味がなくて……」

マジで？ と彼の表情が言っていた。

恋愛経験が乏しい人は、今時、珍しくもないのに。

「もつと言うなら、高校の時の人も付き合っていたというより、一緒に登下校していただけでした」

それが何か？ と私は聞き直る。

すると予想に反して、彼がフツと笑った。

「だったら、俺の家に住んでみるといい」

あまりにも自然にそう提案する。

私は一瞬思考が止まった。

「ええーっ？ どうして、そうなるんですか？」

彼の言葉をようやく呑み込むと、異議を唱える。

「君に高御堂家が合うかどうか、判断してもらうためだ。その間に俺とも交流できる。それに、俺の家は君のアパートより君の職場に近い」

至極当然のことのように、彼は言う。

「引越しするなら、今週末がいい。業者も手配しよう」

啞然とする私を他所に、スマートフォンで予定をチェックしながら計画を進めていこうとした。

「ちょ、ちょっと待って。私はまだ高御堂家に住むと決めてません」

「いつ決まる？」

彼が間を置かずに聞く。

いつって――

「難しく考えるな。家には空き部屋がたくさんある。シェアハウスだと思えばいい。住んでみて嫌だったら、すぐ出ていっても構わない。費用は全て俺が持つ。君に損はないはずだ」

左手は彼に握られたままだ。

彼の手は相変わらず熱くて、酔わせるように私の感覚を鈍らせる。

全てが非日常的で、これは夢かもしれないと思ってしまう。

「三日後……？」

それが十分な時間なのかも分からずに答えていた。

「いいだろう。三日後に連絡する」

彼が私の手を自分の唇に近づける。

何をされるのか見当もつかない私の手の甲に、彼の唇が触れた。

「――ッ」

ビクッと引つ込めようとした私の手を彼は逃さない。逃さずに――

「いい返事を期待している」

たった今口付けた箇所を、指でなぞる。

その行為は誰にも感じたことのない、未知の感覚を私に送ったのだった。

朝なのにまだ夢の中にいるみたいに、頭がボーッとしていた。

いつもなら目覚め良く、直ぐに体を起こせるのに、今朝の私はベッドの中でぐずついている。手を伸ばしてベッド脇の柵から、体温計を取り出した。

体温を測ると、三十六度五分。平温だ。

仕方なくソソソ起き上がり、洗面所に向かう。

熱っぽさの原因は分かっている。

昨夜、手の甲にされた彼のキスだ。

挨拶程度のキスで、こんな微熱のような感覚が続くなんて……よほど私は免疫がないの？

ちよつとヤバくない？ 五ヶ月前に、二十三歳になったというのに。

寝癖がついた自分の顔を鏡で見ながら、不安になった。

もしかして、男性に免疫を付けるためにも、高御堂家で暮らしてみたほうがいいのではないだろうか？

ふとそんな考えが頭に浮かぶ。

いやいやいやと、私は慌てて否定した。

こんな突拍子もない話、どう考えても断るのが正解だ。社会人という自覚を持って判断しないと。これが一日目の私の答えだった。

二日目は心に余裕が出てきたのか、高御堂家での日常生活に関してアレコレと想像を巡らせてみる。

「馳走になった時はかなり豪勢だったけど、普段はどんな食事をしているのだろう、とか。あんな大きな家だったら、お風呂は温泉のようになり広いだろうな、とか。

そして、彼らの生活を垣間見るのも悪くないのでは、と思ってしまう、ちよつと待った、と自分を止めた。

仕事なのに、手の甲にされたキスを思い出して、一人で焦ってしまったではないか。

それに、どうして彼が私に執着しているのかも分からない。

動画を見て心を奪われたと言われても、到底本気だとは……

やっぱり彼から連絡が来たら、断ろう。

当然、二日目も私の答えは変わらなかった。

彼に返事をしなければいけない三日目。

左手を無意識に見ながら職場の給湯室でコーヒーが落ちるのを待っていると、水野所長がやってくる。

「左手がどうかしたの？ ここ数日、凄く気にしているみたいだけど」

「ええっ？ 全然気にしてません」

私はいけないものでも見られたかのように、左手を後ろに隠す。
「そう？」

水野所長は私の過剰な反応を気にせず、私と自分のマグカップにコーヒーを入れる。そして、そのコーヒーを口にし、フウと一息ついた。

「御曹司に何かされた？」

「コーヒーが私の口からブツと噴き零れ、ダークカラーのセーターを汚す。」

「な、何もされてないです。どうしてそんなこと聞くんですか？」

あらあらと水野所長に渡されたペーパータオルで、私はセーターの汚れを拭き取った。

「顔が赤くなっているからよ」

私って分かりやすすぎ。

「良かったら相談に乗るわよ？」

セーターを拭き終わった私に、水野所長が申し出てくれる。

正直、迷った。

彼への返事は決まっている。当然NOと言うべきだ。

はつきり答えは出ている。出ているのに――

なぜか私の心が揺れ動く。どんなに正当な理由を並べても、本当にそれでいいの？ と問う自分がいた。

でも、上司に相談することではない気がする。友達とも恋愛関係の話は滅多にしないのに。

ただ、友達は私と似たり寄ったりで、恋愛より趣味に走る女子ばかりだ。ごくたまに恋バナになることはあったが、私はいつも適当にはぐらかしていたし。

もしかすると、そのツケで今、悶々もんもんとしてしまっているのかもしれない。

ならばこの際、経験豊富な水野所長に真つ当な道に導いてもらって、迷いを断ち切ったほうが――

「実は――」

彼のことを話そうとした時、武田先輩が給湯室に入ってきた。

「聞いた？ 亀蔵がアメリカの蒸留酒大手メーカーを買収したってニュース。すげえよなー。俺、

高御堂英之がうちに寄付をして以降、亀蔵の動きから目が離せなくてさー」

彼の大声で、不意にその場が騒がしくなる。

「今夜、一緒にご飯でも食べましょ」

もう恋愛相談はできないなと思っっている私に、水野所長が耳打ちする。

私は頷いて、デスクに戻った。

九時間後、定時になるや、私は水野所長と近くの居酒屋に向かった。

事故の詳細に始まり、高御堂家にほぼ強制的に連れていかれたこと、上から目線で結婚を押し付けられていること、高御堂英之と一緒に暮らしてみないかと誘われていることなど、全てを話す。

カウンター席とテーブルが一つしかない、こぢんまりとした空間に水野所長の笑い声が響いた。

「笑ってしまったてごめんなさいね。花音ちゃんは困ってるのに」

「でも、こんなの笑うしかないです」

「で、花音ちゃんは、高御堂英之のことをどう思ってるの？」

水野所長が、私の盃にお酒を注ぐ。

「そりゃあ、イケメンだとは思いますが、出会ったばかりの人に恋愛感情を抱くなんて、ありません。過去に男性を好きになったことも、きつくないのに」

「そういえば、大学一年の頃からうちの団体に関わっているけど、花音ちゃんの恋愛話なんて聞いたことなかったな」

「恋愛とはずっと無縁でした。だから、心を奪われたと彼に言われてもピンと来なくて。人を好きになるという感情がイマイチ分からないというか。しかも、動画を見て一目惚れって……彼は女性慣れしてるみたいで告白も完璧だったし、嘘なんじゃないかって気がするんです」

苦手だと思っていた恋バナだけど、水野所長に話してみると、案外すらすらと言葉が出てくる。温かい日本酒の力も借りて、私はいつもよりオープンになっていた。

「そう言うけど、彼のことを思い出して顔を赤くした花音ちゃんは、可愛かったわよ？ 普段も可愛いんだけど、なんていうか、もっと女の子っていう可愛さが出てた」

「えっ、私可愛くなんか……モテないし」

「謙遜しない。モテないのは、花音ちゃんが恋愛に興味がないせいよ。出会いもないし……私は高御堂家に飛び込んで、当たって砕けてもいいと思う」

水野所長はそう言って、おでんの大根を美味しそうに噛み締める。断るように後押ししてくれると思っていた私は、面食らった。

「……本当に思ってます？」

「絶対そう思う。私も昔あったのよ。まだ恋愛もそんなに経験してなかった頃に、手の届かないような男性に誘われたことが。初めは彼の手を取るのも勇気が要ったけど、彼の胸に飛び込んでみて世界が広がったわ。結局破局しちゃったものの、その経験があつて今の旦那に落ち着いたの」

水野所長が幸せそうに微笑む。

「花音ちゃんが迷っているのは、自分の殻から抜け出したいと思ってるからじゃないかしら」

その言葉で、私の気持ちに閃光が走った。

モヤモヤの原因はまさにそれだ。

だからいくら自分を納得させようとしても、それでいいのかと疑問を感じてしまうのだ。

「上手いけば、万々歳。駄目でも、それをバネに女を上げればいいじゃない。もし何か問題があつたら、うちの理事の弁護士に訴えてもらおうから」

水野所長が力強く、私の背中を押す。

その後、熱燗とおでんで温まった私と水野所長は、お店を出た。

私はその温かさが消えないうちに、自分から高御堂英之に連絡する。

高御堂家で暮らしてみます——と。

彼から電話で返事が来たのは、その直後だった。

私が高御堂家に引越したのは、まだ真冬の天気が続く二月初旬。彼と食事に行つてからたった四日間しか経っていない、土曜日の夕方だった。

返事をした翌日に引越したわけは、彼の押しに負けたのと、引越し作業が超簡単だったせいだ。

キッチン用品は必要なかったし、いつでも戻れるようにアパートはそのままキープするから、衣類を荷造りするだけで済む。業者の手配も断り、大きなスーツケース二つと段ボール箱一つを持って移動した。

タクシーで高御堂家に着くと、キヨさんと門松さんが迎えてくれる。

「あなたの歓迎のための晩餐会ばんさんかいが一時間後にありますから、それなりの服装に着替えて、一階に下りてきてください」

早速私を部屋に案内すると、キヨさんがきびきびと予定を告げた。

門松さんに荷物を全て運んでもらった私は、自分のアパートよりも広い部屋を見渡す。

高い格天井こうてんじやうに、バルコニーへ続く大きな格子窓。板床と壁の腰の高さまで貼られた木のパネルが、大正レトロを感じさせる。

服や小物をクローゼットにしまうと、私は部屋の片隅にあるもう一つのドアが気になった。

クローゼットや部屋の入り口のドアと違って、アーチ型になっている。
何のドア？

好奇心が湧き、ドアノブに手をかけた。

開けると、ドアの向こうに更にドアがある。

二重ドアなんて、パニックルームみたい。

ドキドキしながら奥のドアを開ける――

そこにいたのは、半裸の高御堂英之だった。

ギャーという私の悲鳴がこだまする。

「ここは俺の部屋だ。いて当たり前だろ」

高御堂英之が耳を塞いだ。

「ご、ご、ごめんなさい！」

すぐに私はドアを閉め、バクバクしている心臓を手で押さえる。直後、ジーンズしか穿はいていない彼が、ドアを開けて私の部屋に入ってきた。

「このドアがあなたの部屋に通じてるって、知らなかったんです！」

キヤーと彼の半裸を見ないように顔を手で覆おほい、私は必死で弁明する。

「この部屋は、俺の未来の妻用だ。だから部屋が続いている。悲鳴を上げないなら、いつでも俺の部屋に入ってきていい」

慌てふためく私に彼が近づいてきた。

「う、上に何か羽織はおつてくれますか？」
「重症じゅうじょうだな」

彼が尚も近づき、私は足がもつれて床に尻餅しりもちをついた。「大丈夫か」と彼が手を貸してくれる。彼に手を握られるのは、これで二回目だ。

その事実を過剰に意識して立ち上がると、堅そうな裸の胸に直面した。心臓が爆発寸前になる。

高御堂家に着いてまだ一時間も経ってないのに、こんな試練しげんに曝さらされるなんて！
「も、もう大丈夫なので、手を離してください」

そう懇願しているのに、彼は私の手を離さない。

「嫌だと言ったら？」

面白がるように、口の端が上がっている。

私から目を離さず、私の手を自分の顔に近づけると、彼は甲に口付けをした。唇で触れるだけでなく、肌を舐なめる。

「や……」

艶なめかしい感触に、私の口から無意識に声が漏れた。

今までに出したことのない艶なめのある声が——その瞬間、彼の目が熱を帯おびる。

……気がした。

けれどパツと彼は手を離す。

「晚餐ばんさんの時間だ」

急に素に戻ると、自分の部屋に帰る。

パターンとドアが閉められた。

初っ端からこんな感じで、ここで生きていけるのだろうか？

私はヘナツとその場に座り込んだのだった。

一階のダイニングルームは、天井からシャンデリアが下がり、壁に高御堂家の先祖と思われる白黒の写真が飾られた、豪華な部屋だった。

十八席もある長いテーブルの端に、私は高御堂英之と並んで座り、向かいには彼の弟明之君あきゆきが座って、会長が来るのを待っている。背後には薄桃色の着物を着たお手伝いの丸井まるいさんが控え、テーブルの上にはちよっとした前菜と食前酒が準備されていた。

「花音ちゃんって、俺より四歳年上なんだ。全然見えないね。同い年かと思ったよ」

明之君は、高御堂英之を可愛いバージョンにしたような、人懐っこい十九歳の男の子だ。私のことをいきなりちゃん付けで呼び、高御堂英之に注意される。

初対面なのに、距離感が近い。

「苗字で呼ぶなんて、ダサいだろ。会長も花音ちゃんって呼んでたじゃん」